

チーム医療で緩和ケア

在宅緩和ケアに特化した診療所を開いて二年半。がん患者を中心に二百人を自宅で見守ってきた。



「患者を楽にさせられるのは医者だけでなく、楽しいと感じさせられるのは家族」。人生の最期を少しでも満足し

て、納得して自宅で迎えられることを目指す。外来はほとんど受けず、三重県四日市市北部や周辺の市町の、車で三十分で行ける範囲で百人近い患者を抱え、連日、十件近い訪問診療を続ける。頼りは、血圧の測定、尿の処理から車の運転まで担う看護師や医療秘書。おかげで、医師は患者の容体の聞き取りに集中できる。地方ならではの長い移動時間も、携帯電話で訪問介護の事業所などと連絡を取り、時間を

いしが在宅ケアクリニック (三重県四日市市)

院長 石賀 丈士さん (36)



ベッドの患者に声をかける石賀丈士さん—三重県菟野町で

究極のサービスを

有効に使う。チームワークを武器に「地方の在宅医療のシステムをつくりたい」と実績を積み重ねている。大阪府大東市出身。子どものころから人のやらないことに挑む性

格だった。高校時代の夢は「砂漠で作物を育てること」。進路が変わったのは、大学受験の際に祖母が亡くなったときだ。

祖母は晩年、石賀さんのことが認識できなかった。人生で初めてみた祖母は、苦しむこと

なく逝った。しかし、在宅医を目指す人を増やしたくて平気なふりをしていたが、二百六十五日二十四時間、体調が悪くても気が抜けない日々は、薬ではなかった。

今は常勤医と非常勤医が一人ずつ加わり、四月にはまた一人常勤医が増える。目指していたチーム医療の姿が、ようやく実現しそうだ。

一人の患者とじっくり向き合うケアにこだわり、「在宅医療は、究極のサービス業」と語る。医師が増えれば一人一人の個性は出るが、サービスの質は妥協しないつもりだ。

(福岡龍行)